



さざんか

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第45号(R6. 1. 17)



新しき 年の始めに かくしこそ 千年をかねて たのしきを積み

～新年にこのようにみんな集まって千年も先の繁栄を心に描き、楽しい事を山のように積み重ねよう～

生徒会専門委員長からのメッセージ Part3

新専門委員長の意気込みを読む
最終回です。



【 文化図書委員長 宮原 蒼 さん 】

こんにちは。この度、文化図書委員長に就任しました、宮原蒼です。突然ですが、皆さんは本が好きですか？ 私は大好きです。しかし、私のまわりだけでも「本をあまり読まない」という人は沢山います。そんな人たちにも読書をする楽しさを味わってもらいたいので、どんな人でも楽しめる、図書室へ来たくするようなイベントをやりたいと思っています。人前で話したりアドリブを入れたりするのは苦手ですが、精一杯がんばります。一年間よろしくお願いします。

【 文化図書委員長 川原 統也 さん 】

こんにちは。文化図書委員長になりました川原統也です。皆さんは本が好きですか？ 本は好きでも、なかなか本を読む機会がないという人も多いのではないのでしょうか。私も読書自体は好きだけど、時間があまりなく本を読まないということがありました。だから、本を読むことで得られる効果や本の楽しさをアピールしていき、河東中生のみんなが、本好きになれるようにしていきたいです。また、文化祭が大成功できるように、仲間と協力して全力で頑張ります。これから一年間よろしくお願いします。



【 保健委員長 永井 優帆 さん 】

こんにちは！ 保健委員長になりました、永井優帆です。私はこの一年間で保健委員長として自分の仕事に責任を持って行動し、いろいろなことに積極的に取り組みたいと思います。また、全校生徒のみなさんが安心安全、元気で過ごすためにも、これから行う放送や委員会活動、取り組みなどに力をそそいでいきたいと思っています。もっという河東中学校になるために、うまくいかないこともたくさんあると思いますが、一生懸命に活動していくのでよろしくお願いします。



【 保健委員長 上野 葦実 さん 】

こんにちは。保健委員長になりました上野 葦実です。私は、今年みなさんが安心して楽しく健康に日々の学校生活を送っていけるように私からどんどん元気を発信していきます。そして、学校の雰囲気を持ち上げそれをどんどん広げてだれかが嫌な思いをすることがない元気で素敵な学校をつくっていきます。そのために、保健委員長として、換気の放送やわかりやすい保健だよりを作れるように頑張ります。どうぞ一年間宜しくお願い致します。



どんな時も生きることには意味がある ～ ヴィクトール・フランクルが伝えようとしたこと ～

今回のコラムは、この4年間で書いてきた中で最も難しい内容です。中学生にはわからないことが多いと思います。今回、この記事を書いたのは、みなさんが現在あるいは将来、生きづらいと感じたり困難や苦悩といったものに出くわしたりしたとき、なんとか乗り越えるヒントになるかもしれないと思ったからです。

生きてると、楽しいことばかりやうまくいくことばかりが起こればいいのですが、つらいことや悲しいこと、都合のわるいことなどもたくさんふりかかってきます。そんな時、いわゆる困難や苦悩や壁にぶつかった時、どう対処したらよいかという時に参考になればと思います。

今回、紹介するのはこれほどの生命や精神の危機があるのか、絶望や限界状況という言葉ですら言い表せない人類が経験した極限状態にどう対応し生き残ったのかという記録です。

第二次世界大戦中、ヒトラーのナチスドイツは600万人のユダヤ人を強制収容所に収容し虐殺しました。その中で奇跡的に生き残ったオーストリアの心理学者・ヴィクトール・フランクルは、戦後、アウシュビッツ収容所で何が行われ、自分がどういう考え方をして生き抜くことができたのかをまとめました。それが世界的なベストセラーになった『夜と霧』(原題:強制収容所における一心理学者の体験)という本です。



この本の中には、人間はこうまで残酷なことをし、悪を行い得るのかということも描かれていますが、それ以上に地獄のような極悪の世界でも、清い心を保ち豊かな心の世界を守り、希望をもって心の自由を失わずに生き抜くことができるのかという人間の高貴さと尊厳を思わずにはいられません。

みなさんは、フランクルのような極端な絶望を経験することはないでしょうが、悩みや苦しみは小さなものであっても本人にとってはつらく深刻なものです。そんな時、どう心を保ち乗り越えていったらいいのかという参考になればと思います。

この本の核心部分は、“どんな時でも、人生には意味がある”ということですが、フランクルのように、明日、毒ガス室に送られるかもしれないそんな極限状態でも、生きる意味があるとフランクルは言い切ります。

さらに、フランクルの革新的な発想は、これまで多くの人類が考えてきた「人生の意味を問う」のではなく、私たちが「人生から問われている」と転換したことです。私たちはふつう、自分に起こる出来事や人生や運といったことに意味づけをしようしますが、フランクルは逆だと言います。さまざまに自分が遭遇する出来事に対してどう考えどう対処するのかを、人生が私たちに常に問っている・試していると逆転して考えたわけです。

フランクルはこう書き残しています。「私たち人間がなすべきことは、生きる意味はあるのかと“人生を問う”ことではなくて、人生のさまざまな状況に直面しながら、その都度、“人生から問われている”ことに全力で答えていくことです。そうすることで自分の人生に与えられている“使命(ミッション)”をまっとうすることです。そこに人間としての成長と希望があります。」

この本に描かれているエッセンスをまとめると次のようになります。

どんな時でも、人生には意味がある。この人生のどこかにあなたを必要とする「何か」がある。あなたを必要とする「誰か」がいる。その「何か」や「誰か」は、あなたに発見され実現されるのをただ待っている。

私たちは、常にこの「何か」や「誰か」によって必要とされ待たれている。だから、たとえ今がどんなに苦しくても、投げ出したり逃げ出したりする必要はない。いつか人生に「イエス」と言うことができる日が必ずやってくる。たとえ今、あなたが人生に「イエス」と言えなくても、人生の方からあなたに「イエス」と光を差し込んでくる日がいつか必ずやってくる。

フランクルが数年間にわたって、あの人類史上最も悲惨で絶望状態の強制収容所で生き延びることができたのは、このような心理学と考え方があったからでした。(参考文献:フランクル著「夜と霧」みすず書房)